

近世日本の大衆文化における日本意識の表現-17・18世紀を中心に-

田中, 優子 / TANAKA, Yuko

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

科学研究費助成事業 (科学研究費補助金) 研究成果報告書

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

4

(発行年 / Year)

2013-05

様式 C - 19

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 15 日現在

機関番号：32675

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2010 年度～2012 年度

課題番号：22320071

研究課題名（和文）近世日本の大衆文化における「日本」意識の表現－17・18世紀を中心に－

研究課題名（英文）Japan-consciousness in the popular culture of 17th-18th centuries

研究代表者

田中 優子 (TANAKA YUKO)

法政大学・社会学部・教授

研究者番号：40139390

研究成果の概要（和文）：

本研究では、次のことが明らかになった。第一に、江戸庶民が日本の「領域」を意識してきた、その経過と変遷である。第二に、歴史上の日本意識の高揚の理由や、国家と地域の齟齬という問題に気付くことになった。第三に東アジアにおける「華夷意識」が、日本においても国家と地域の関係に大きな影響を与えていることが認識できた。総じて、近世では近代とは異なる日本意識が様々な形で表現されていたことがわかった。また大学院博士課程の学生たちが、自らの研究の中で「日本」意識を考え、研究に取り入れるようになった。

研究成果の概要（英文）：

This research has revealed points as below:

- 1) The general public in the Tokugawa period had become conscious of the domain of the whole country: the process and its transition
- 2) The framework of the country was more strongly aroused in a crisis or by direct/indirect contact of foreign people and their culture; but there was disparity between the centre and the provinces.
- 3) Perception of Sino-centric order in East Asia was adapted to Japan and applied to relations with the centre and the provinces/periphery.
- 4) As a whole, "Japan" was represented in various forms in the Tokugawa period, which are different from those in the modern period.

In addition, our project has stimulated graduate students in International Japanese Studies Institute of Hosei University to introduce the viewpoint of how national consciousness was formed.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010 年度	3,600,000	1,080,000	4,680,000
2011 年度	2,700,000	810,000	3,510,000
2012 年度	1,900,000	570,000	2,470,000
年度			
年度			
総計	8,200,000	2,460,000	10,660,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学、各国文学・文学論

キーワード：日本、アイデンティティ、17-18 世紀、大衆文化、東アジア、華夷意識、日本と東北、日本と琉球

1. 研究開始当初の背景

(1)法政大学国際日本学研究所で2002年度～2006年度にわたって取り組まれたプロジェクト「富士山をめぐる日本人の心性」に淵源を持つ。富士山がいかにして日本を象徴し日本人の精神を支える存在となったのかを多角的に検討する中で、他の面でも「日本」的なるものの形成と認識の過程を探る必要があるという議論となった。

(2)さらに、国際日本学研究所において、古代から近代にわたる日本意識研究が開始され、それを近世の庶民文化の中で考える必要があると考えた。

(3)もうひとつの背景は、法政大学に田中優子、小林ふみ子、横山泰子など近世文学研究者が集まっていたことである。文学部だけではなく、複数の学部にもまたがり、近世文学、近世文化をそれぞれ研究していた。さらにその研究スタイルが、図版を扱う、他分野に精通しているなどの共通点があり、その関係で国際日本学研究所に集まっていた。そこで、中世文学者で近世に至るまでの印刷・出版にも詳しい小秋元段、中国文学者で近世日本文学との関係を深く研究している大木康の助けを借り、近世庶民文化に集中して日本意識の研究を開始することとした。

2. 研究の目的

本研究は、近世期の日本、とりわけその17-18世紀の大衆文化を対象に、その表現から当時の「日本」意識を明らかにすることを目的とした。近世日本を生きた人々は、外との関係において「日本」なるものをどのような時に、いかに認識し、自らのアイデンティティとしてどう捉えたのか。これまで日本思想史の分野で多く行われてきたその研究を、出版・演劇等を介して広く大衆が享受した文学・文化の次元で見直す必要があると考えた。とくに異文化の受容にあたって意識された「日本」とは何かを理解することで、近代的ナショナリズムによって提示されるステレオタイプな「日本」像とは異なる、広く開かれた「日本」的なるもの、および、アジアと共有可能な「日本」意識のあり方を示すことを目的とした。

3. 研究の方法

「近代におけるナショナリズムとの相違の検討」「対外認識や異文化受容の裏側にある日本意識表現の研究」「地域アイデンティティと日本意識の関係の研究」という3つの柱を立てた。研究対象は、文学・文化史上よく知られた作品だけでなく、当時、大衆的に受容された種々の作品や実用的・教訓的なもの

まで含めた。とくに地図類の収集によって、参勤交代、旅、出版などが日本の領域意識をどう作っていったかに注目した。また、地方文化を見ることで、中央と地方がどのようにアイデンティティ創造にかかわっていったかを考察した。同時に見世物や戯作や物語に、異国人がどう描かれたかを認識することで、「同国人」意識の形成を検証した。

4. 研究成果

(1)2010年度の参勤交代や地図の研究、2011年度の国際シンポジウムにおける「日本意識と対外意識」研究、2012年度における「みちのくワークショップ」およびシンポジウム「江戸人の考えた日本の姿－世界の中の自分たち－」、そして継続しておこなった近世地図類の購入により、江戸庶民が日本の「領域」をどう意識してきたか、その変遷を把握することができた。単に地図上の認識というだけではなく、実際に国内を徒歩や船で旅することで、日本の領域を多くの人が意識するようになり、それは同時に領域外への関心と呼び起こした。

また、朝鮮通信使、琉球使節、オランダ商館長たちの江戸滞在によって、実際に外国人と接触するようになったのが、江戸時代の特徴であり、庶民はそれらを一種のイベントとして受け容れた。さらに漢詩、漢文の庶民生活への浸透は、同時に日本語や日本文化の独自性への意識を生み出すことになり、それら外国との接触が江戸庶民文化とその日本意識の特徴であることも明確になった。

琉球や朝鮮、東北や北海道への関心だけでなく、世界にどのような人々が暮らしているかに対する関心も高まった。海外旅行はできなかったのも、その想像は前時代からの造形をもとに新しい要素を付け加えることになり、それが庶民文化の新しい表現に流れ込んだことは、数々の浮世絵で明らかになった。世界に関する多様な文化表現は、大衆に異国とは異なる自分たちの国としての日本を意識させ、日本意識を涵養したことが認められた。

(2)東日本大震災を契機に、研究に「国難」や「みちのく」を導き入れることになり、歴史上の日本意識の高揚の理由や、国家と地域の齟齬という問題に気付くことになった。蒙古襲来に代表される国難が日本の意識を高めたことは確かで、そのことは江戸時代の文化にも痕跡を残し、幕末の開国におけるナショナリズムの高揚にもつながったと考えられる。

(3)研究全体を通して、常に直面してきたのが「華夷意識」の問題であり、この秩序が東

アジアおよび、国家と地域の意識に大きな影響を与えていることが認識できた。中国を中心とする「中華型華夷意識」を日本が受容しながら世界の中で自国を位置づけようとする時、自国を中心とする「日本型華夷意識」が生じることが認められたうえ、華夷意識が日本国内の都鄙意識とつながることも考察された。今後は、華夷意識が内包する問題点を共有したうえで、東アジア諸国の「各国型華夷意識」との共通点を探る研究が可能になると思われる。

(4)2010 年度より始めた岩波思想大系の中の 17・18 世紀のテキストのスキニングとデータ化とその使用により、大学院博士課程の学生たちが、自らの研究の中で「日本」意識を考え、研究に取り入れるようになった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 15 件)

- ① 小林ふみ子「中洲の旅人」『日本文学』査読有、第 61 巻第 9 号、2012、58-61
- ② 小林ふみ子「「やわらぐ国」日本という自己像」『国際日本学研究叢書 16 日本アイデンティティ形成と反響』査読有、第 16 号、2012、97-111
- ③ 小林ふみ子「自意識と憧憬と一長崎における江戸文人大田南畝の中国意識を例に」『国際日本学研究叢書 15 地域発展のための日本研究』査読有、第 15 号、2012、109-122
- ④ 横山泰子「秘術の公開-江戸時代の手品本に見られるまじないについて-」『国立歴史民俗博物館研究報告』査読有、第 174 集、2012、43-55
- ⑤ 横山泰子「続・日本の絵本を非日本語で読む-法政大学大学院国際日本学インスティテュートでの試み」『小金井論集』査読なし、第 9 号、2012、83-100
- ⑥ 小秋元段「『梅松論』における足利尊氏—新たななる将軍像の造形—」『日本文学誌要』査読無、第 86 号、2012 年、3-11
- ⑦ 大木康「彭釗南の戯曲『影梅庵』『香腕楼』とその時代」『東洋文化研究所紀要』査読無、第 161 冊、2012、1-85
- ⑧ 横山泰子「ナショナルか、ローカルか、もしかしてネイティブ?—私と平賀源内はどのレベルで日本を意識するのか—」『国際日本学・研究成果報告集』査読有、第 9 号、2011、113-126
- ⑨ 横山泰子「日本の絵本を非日本語で読む—法政大学大学院国際日本学インスティテュートでの試み」『法政大学小金井論集』査読無、第 8 号、2011、

167-185

- ⑩ 大木康「中国演劇における鍾馗—古典から現代まで—」『観世』査読有、平成 23 年 5 月号、2011、28-34
- ⑪ 田中優子「「日本」と「国益」」『国際日本学・研究成果報告集』査読有、第 8 号、2010、127-137
- ⑫ 横山泰子「玉藻前説話にみられる自国意識と異国趣味」『国際日本学・研究成果報告集』査読有、8 号、2010、165-176
- ⑬ 小秋元段「古活字版の淵源をめぐる諸問題—所謂キリシタン版起源説を中心に—」『国際日本学・研究成果報告集』査読有、8 号、2010、221-237
- ⑭ 小林ふみ子「江戸戯作の「ニッポン」自慢」『国際日本学・研究成果報告集』査読有、8 号、2010、177-187
- ⑮ 大木康「冒襄における杜詩」『東洋文化研究所紀要』査読無、第 158 冊号、2010、1-34

〔学会発表〕(計 15 件)

- ① 小林ふみ子「展示より／伝南畝『琉球年代記』刊行事情にみる日本と琉球」、シンポジウム江戸人の考えた日本の姿-世界の中の自分たち、2013. 3. 17、法政大学
- ② 横山泰子「怪物ではない＜日本の私＞」、シンポジウム江戸人の考えた日本の姿-世界の中の自分たち、2013. 3. 17、法政大学
- ③ 小秋元段「中世後期の文芸とみちのく」みちのくワークショップ中世古代篇——東北文学と日本意識 2013. 1. 18、法政大学
- ④ 大木康「明末「悪僧小説」初探」近世意象与文化典型 2012. 11. 29 台湾中正大学、台湾
- ⑤ 大木康 (“Golden Mansions Are to Be Found in the Books’: On The Encouragement of Learning by Emperor Zhenzong of the Song” The Literature of High Stakes and Long Odds: Locating Civil Service Examination Writings in the Late Imperial Cultural Landscape, 2012. 11. 18, University of Massachusetts, Boston, USA)
- ⑥ 田中優子「近世の蝦夷イメージ」みちのくワークショップ近世篇——東北文学と日本意識、2012. 9. 21、法政大学
- ⑦ 小林ふみ子「みちのくからみる狂歌・狂詩文」みちのくワークショップ近世篇——東北文学と日本意識、2012. 9. 21、法政大学
- ⑧ 横山泰子「只野真葛と平尾魯仙」みちのくワークショップ近世篇——東北文学と日本意識、2012. 9. 21、法政大学

- ⑨ 横山泰子「幕末の災いと日本意識」、シンポジウム〈日本〉を意識する時、2012.3.9、法政大学
- ⑩ 横山泰子「日本の妖怪手品」、日文研 EAJS ワークショップ 怪異・妖怪文化の伝統と創造、2011.8.24、タリン大学、エストニア
- ⑪ 大木康「江戸時代人の対中意識—「漢」と「唐」をめぐる—」国際シンポジウム 日本意識と対外意識、2011.7.17、法政大学
- ⑫ 横山泰子「ナショナルか、ローカルか、もしかしてネイティブ?—ノスコ著『江戸社会と国学』の翻訳作業を振り返って思うこと」、シンポジウム 日本意識の時空、2011.2.27、法政大学
- ⑬ 小秋元段「日本意識の変遷—中世の文学作品を中心に—」シンポジウム 日本意識の時空、2011.2.27、法政大学
- ⑭ 大木康「中国と日本の出版文化—明末と江戸時代を中心に」、台湾政治大学中文系、2010.12.2、台湾政治大学、台湾
- ⑮ 小林ふみ子「「和らぐ国」というアイデンティティ」、日本のアイデンティティ—形成と反響—シンポジウム、2010.11.1、アルザス欧州日本学研究所、フランス

〔図書〕(計10件)

- ① 田中優子 LTCB International Library Trust / International House of Japan "The Power of the Weave" 2013、222
- ② 大木康『文学のエコロジー』放送大学教育振興会、2013、102-140
- ③ 田中優子 岩波書店『グローバリゼーションの中の江戸』2012、224
- ④ 田中優子 大月書店『降りる思想：江戸・ブータンに学ぶ』2012、223
- ⑤ 横山泰子 青弓社『妖怪手品の時代』2012、246
- ⑥ 大木康 浙江大学出版社『明末画本的興盛及其背景』、2012、222-233
- ⑦ 小秋元段、印刷博物館『空海からのおくりもの—高野山の書庫の扉をひらく』2011、64、67、94-116、127-128、138-140、182-186、190-194
- ⑧ 小秋元段『東アジア書誌学への招待/第2巻』東方書店、2011、61-77
- ⑨ 田中優子 小学館『江戸っ子はなぜ宵越しの銭を持たないのか?』2010、222
- ⑩ 田中優子 朝日新聞社『布のちから』2010、281

6. 研究組織

(1) 研究代表者

田中 優子 (TANAKA YUKO)
法政大学・社会学部・教授

研究者番号：40139390

(2) 研究分担者

小林 ふみ子 (KOBAYASHI FUMIKO)
法政大学・文学部・准教授
研究者番号：00386335
横山 泰子 (YOKOYAMA YASUKO)
法政大学・理工学部・教授
研究者番号：60318607
小秋元 段 (KOAKIMOTO DAN)
法政大学・文学部・教授
研究者番号：30281554
大木 康 (OOKI YASUSHI)
東京大学・東洋文化研究所・教授、所長
研究者番号：70185213

(3) 連携研究者

王 敏 (WAN MIN)
法政大学・国際日本学研究所・教授
研究者番号：30296371